

岩村町 佐藤 一斎



1772年～1859年



一斎七十四歳の書

儒学は孔子に始まる中国古来の政治、道徳の学問である。

寛政二年、一斎十九歳で藩の仕事に就き、四歳年上の第三代岩村藩主松平乗蘊の三男衡と兄弟のように仲良く接した。一斎は二十歳の時、事情があつて職を免ぜられたので、翌年、儒学の学間に打ち込む決意で大阪・京都に出かけた。大阪では懐德堂中井竹山のもとで陽明学を学び、その後、幕府の公的学問である朱子学の本家、林簡順（林家七世）の門に入つた。林簡順には跡継ぎがいなかつたため、簡順亡き後、松平衡を養子として迎え、八世大学頭・林述斎として門下生の指導に当たらせた。二十二歳の一斎は改めて述斎の門下生となつた。その後、一斎は三十四歳で塾長となり、述斎の片腕となつて補佐し、多くの学生の教育に努めた。

一斎が七十歳の時、述斎が七十四歳で没し、幕府は一斎を昌平坂学問所の儒官に任じた。一斎は、三千人も言われる弟子達を育て、人材を全国に送り出した。

一斎の教えは、幕末から維新に至る歴史的大転換期に活躍した多くの有能な人々に多大な影響を与えた。吉田松陰、勝海舟、坂本竜馬などは一斎の孫弟子にあたる。

その教えを書いたのが一斎が円熟した後半生のおよそ四十年にわたり筆録した『言志四錄』（言志録・言志後録・言志晩録・言志叢録）である。

『言志四錄』は四巻・千百三十三条からなるもので、その内容は学問・修養・教育・道徳・読書・法律・政

治・軍事・養生等々、多方面にわたる歴史的大転換期に活躍した多くの有能な人々に多大な影響を与えた。吉田松陰、勝海舟、坂本竜馬などは一斎の孫弟子にあたる。

その教えを書いたのが一斎が円熟した後半生のおよそ四十年にわたり筆録した『言志四錄』（言志録・言志後録・言志晩録・言志叢録）である。

（自分のおかれている立場を自覚し、言行を律してゆけば、現状で満足するこ

語録抄

分を知り 然る後に足るを知る
（言志録四十二）

春風を以て人に接し 秋霜を以て自ら肅む
（言志後録三十三）

（春のさわやかで温かい風のような態度で人に接し、秋の霜のような厳しい態度で自分と向き合い自分を慎むことが大事である）

石重し 故に動かず 根深し
故に抜けず 人は常に自重を知るべし
（言志晩録二二二）

（石は重いから動かない。大木は根が深く張つているから抜けない。人もこれと

同じように自分の言動には自重して、軽々しく振る舞わない）

われ自ら感じて 而る後に人之
れに感ず
（言志叢録一一九）

（何事も、まず自分が感動しなければ、他人を感動させる事などできない）



『言志四錄』

女子教育に生涯をささげた

岩村町 下田 歌子



1854年～1936年

下田歌子は恵那郡岩村の熊洞（くまほら）岩村藩、士族の娘として生まれた。彼女は幼児から聰明で、三歳のときに最初の和歌を詠み、三、四歳頃から中国の古典の読み方を聞いて覚え、優れた画才も備えていた。

当時の女子教育は遅々たるものであつて、時代にふさわしい女子教育者の出現が要望されていた。

歌子は、当時、政府の要人として活躍していた伊藤博文、山県有朋、井上毅等の勧めに従い、明治十五年自家に私立学校を開設し、「桃の若い木は燃え立つように輝いている。その花のような女性が嫁げばその家には幸せが訪れる」という『詩経』の一節から「桃夭学校」と命名した。



歌子著『女子消息文』『女子国語読本』

スイス、アメリカ、カナダ等を歴訪して二年間の外遊を終えた。

綾錦着てかへらずば三国山
またふたたびは越えじとぞ思ふ
(立派にならなければ、私はこの三国山

を再び越えて岩村には戻らない)



歌子の銅像

十六歳で上京、翌年、宮中の女官に登用された。宮中の歌会で優れた歌を詠み、皇后より「歌子」の名を賜つた。宮中で八年間、和歌と和漢洋学を深く学び、教養を高める機会を得た。しかし、明治初期の社会は、前代の身分関係や意識が一掃されず、旧制度の殻をかかえていた。

明治十七年、華族女学校創設に携わり、翌年の開設と同時に監事兼教授に就任。華族、上流家庭の子女百四十三名に対する教育を行つた。

明治二十六年、三十九歳の歌子

は、イギリス王室や欧米各国の女子教育状況視察を命ぜられ、自身渡欧した。パリを経てロンドンに渡り、下宿して私立女学校にも通つた。バッキンガム宮殿では、桂袴衣装でビクトリア女王にも謁見してい

る。その後、歌子は、昭和十一年、八十三歳の生涯を閉じた。その前年、功績を讃え「顕彰碑」が岩村町に建立された。



顕彰碑『明治四年岩村を発つ時の歌』

歌子を中心に国文漢学、習字等が教えられ、特に源氏物語の講義と和歌の指導に力が注がれ、上流家庭の子女が多く入塾した。帰国したばかりの津田梅子が英語担当の教師として加わった。当時、歌子は二十八歳であった。

明治三十一年、帝國婦人協会を設立し、広く一般の女性に知識、技能を授け、品格を磨かせ、自活できる道を与えるという画期的な事業を開始した。翌明治三十二年に協

会付属実践女学校（現在の実践女子大学）と女子工芸学校を開校した。以来、幾多の女学校の設立に関わるとともに、女性の啓蒙運動に携わった。一生を女子教育に捧げた

歌子は、昭和十一年、八十三歳の生涯を閉じた。その前年、功績を讃え「顕彰碑」が岩村町に建立された。

華族女学校に戻った歌子はさまざまな学園の改革を実施した。

明治三十一年、帝國婦人協会を設立し、広く一般の女性に知識、技能を授け、品格を磨かせ、自活できる道を与えるという画期的な事業を開始した。翌明治三十二年に協

植物学の基礎を築いた人

岩村町 三好 學



1862年～1939年

の授業内容を通しての未来への思いである。また、自身で教科書を発行したが、わが国近代教育の夜明けの時期におけるまれにみる第一級の教育史料と言える。



『授業日誌』

三好學は岩村藩・江戸藩邸で生まれ、幼年を岩村で過ごした。しかし、十一歳の時、父が亡くなり、福井県三国町の浄土宗西光寺の住職に預けられ教育を受けた。明治九年、後の石川県第三師範学校に入学、卒業すると岐阜県に帰り、十八歳で土岐学校（現在の瑞浪市土岐小）の教員としてまた校長として授業や学校の運営に当たつた。

明治二十二年帝国大学理科大学植物学科を卒業、大学院に進学し、植物学の研究を続けた後、ドイツへ留学。帰国後三十五歳の若さで帝国大学理科大学教授に就任し、理学博士の学位を受けた。在任中、わが国の植物学の基礎を築き、花菖蒲と桜の研究における第一人者となつた。

毎年、花菖蒲が咲き、花がしほむまでは風雨の日もいとわず培養試験を行い、品種の系統について進化の道程に精密な研究を続け、「花菖蒲図譜」にまとめあげた。一巻につき二

十五種が着色木版で印刷され、写生図は百種が掲載されている。

また、「櫻花図譜」は着色木版の桜花写生図で第一巻には彼岸桜、枝垂桜、染井吉野、白川桜、紅山桜等の里桜七十一図を載せ、第二巻には、里桜その他四十七図を載せている。この図譜中、学名に「ミヨシ」の名の付いた桜が百種をはるかに超えている。



『櫻花図譜』

博士の努力によつて大正八年、「史跡及び天然紀念物保存法」が公布施行された。その後、博士は東京帝国大学教授を退官してからは、天然記念物の保存にますます熱意を燃やし、植物天然記念物の調査活動を精力的に行つた。その調査報告書の中に

- ・静波村（現明智町）の枝垂れ栗
- ・静波村（現明智町）の幹が癒合した夫婦楓（枯れて現存しない）
- ・三郷町のハナノキの自生地など

保存の必要性が明記されている。また、現在様々な分野で用いられていく「景観」という言葉を生んだことをでも知られている。

この克明な授業内容の記録から汲み取りうるものは授業そのものへの熱意と探究心であり、一時間一時間

ばらしさを感じていた。

しかし、明治時代の産業革命の風潮により歴史的に貴重なものや古くからの名勝、自然景観、名木や巨樹などが破壊され切り倒された。

士は激しい怒りと悲しみを感じた。そして、学術上価値のあるものは法律で保護するべきであると、世に先駆けて訴えるようになった。

博士の努力によつて大正八年、「史跡及び天然紀念物保存法」が

公布施行された。その後、博士は東京帝国大学教授を退官してからは、天然記念物の保存にますます熱意を燃やし、植物天然記念物の調査活動を精力的に行つた。そ

明治洋画壇の先駆者

明智町 山本 芳翠



1850年～1906年

なり芳翠の号を与えられた。

芳翠が油彩画に本格的に取り組んだのは、明治九年、工部美術学校が開校され、ファンタネージに師事してからである。明治十年、第一回内国勧業博覧会があり、芳翠は『勾当内侍月詠図』を出品して、花紋章（二等賞）を獲得した。



『裸婦』

山本芳翠は嘉永三年七月、恵那郡野志村（現明智町）で農業と養蚕を営む山本権八の長男として生まれた。芳翠が画家を志すようになったのは、寺子屋の先生、安住寺住職が語った新しい世界の話と當時出回っていた北斎漫画によると言われている。

慶応元年、芳翠十六歳の時、京都へ出、久保田雪江に南宗画を学んだが、本格的に学ぶため中国に渡ろうと横浜に出た。ここで目にしたのが五姓田芳柳の洋風画であった。この新しい表現法に感動し、洋画に転向。この時、芳柳の門下生と

明治十二年、パリ万博の事務局員となり松方正義総裁に随行して渡仏、万博閉会後、パリに残って美術学校に入學し、レオン・ジエロームに新

古典主義の技法を学んだ。明治十三年、日本人初の『裸婦』図を描き、

組んだのは、明治九年、工部美術学校が開校され、ファンタネージに師事してからである。明治十年、第一回内国勧業博覧会があり、芳翠は『勾当内侍月詠図』を出品して、花

紋章（二等賞）を獲得した。

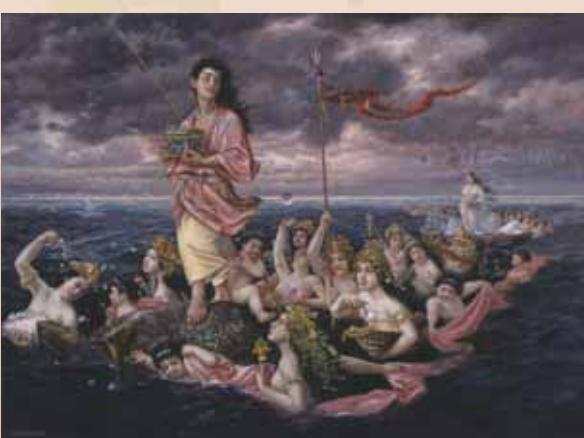
当地の文化財に指定されている。帰国を前にパリの画廊で三百点余の作品で個展を開き好評を得た。



『灯を持つ乙女』

明治十九年、法律を学ぶため渡仏して来た黒田清輝に出会い、彼の作品を鑑みて「この男なら、日本を代表する画家になれる」と転身を勧め、パリでは主流になっていた印象派の画法をラファエル・コランに学ばせた。偉大な芸術家の黒田清輝は、山本芳翠によつて生まれたと言つて過言ではない。

明治二十年、合田清と共に帰国し、画塾の生巧館を開設、後進の指導と洋画普及に情熱を注いだが、



『浦島図』

明治二十六年、大きく成長して帰国した黒田に生巧館を譲り、後進の指導を託した。日本洋画界の発展を願う芳翠の気持ちがよく表わされている。

芳翠の代表作『浦島図』は、日本浪漫主義の最初の作品と言える。芳翠がフランスから帰国した頃は日本国内では伝統的な日本美術のみを重用し、洋画を冷遇視していた。そのため、芳翠は本格的な洋風画写で『浦島図』を描き上げた。

また二大洋画団体「明治美術会」「白馬会」の結成に参加し、洋画団の重鎮の役割を果たした。

養蚕の研究もした医師

大井町 古田 玄達



1841年～1916年

が大事だ。これの発展のためには、良い桑作り、良い蚕の飼育が重要」と桑の研究と蚕の飼い方の研究を始めた。

良い桑の研究では、三河から飯田方面の桑について研究し、明治二十二年には、全国的に良い桑で知られた福島県三春地方まで出かけ、自費で十万本の桑苗を買い、御所の前畠や田に植えて地域に推薦した。人はこれを「古田桑」と呼んだ。また、自宅で養蚕をやり、繭を県の品評会に出品し、優秀賞を得た。

医師としては、貧窮家庭の未熟児医療や栄養不良児医療に温かい気持ちで取り組み、時には医療代も取らなかつたと伝えられている。

また、玄達は「医師は個人の病を治療するのみでなく、社会の病の解決にも関心を持たなければいけない」という使命感を持ち、医療の傍ら「これからの中には養蚕

国鉄明知線の開通に尽くした代議士

大井町 古屋 慶隆



1879年～1945年

た。この間、鉄道参与官や内務政務次官、人造石油製造法委員会委員長などを務めた。

慶隆は識見高く、行動派で、恵那地域の発展に寄与した。その中でも特にあげれば、次のことである。

衆議院議員初当選以来、大井（掛川間（遠美線））の鉄道線や恵那地域と飛騨下呂間の鉄道敷設に向かつて行動的に努力した。大正十一年には大井（明知間）は

慶隆は昭和二十年三月の東京大空襲で、焼夷弾の直撃を受け爆死した。

古屋家は大井宿村の旧家であり、父善造は明治三十六年、衆議院議員総選挙で当選し、一期務めた。

慶隆は大学卒業後大井町町議会議員を務めた後、父の後を継いだ。

で、大正四年、第十二回衆議院議員総選挙に当選し、以来当選九回で（昭和三年の十六回は落選）、昭和十七年には議会数四十八回、在籍年数二十七年六ヶ月で表彰され

これが現在の明知鉄道の始まりである。

工事着手、同十年に明知線は完成

した。

このようにして、彼は「養蚕をする医師」と県下に知られていった。

また、漢詩で各地、各層と交流した。

これが現在の明知鉄道の始まりである。